

PRO-LIFE

胎児を守る運動

中絶に反対する運動

2000年4月 No.114

中絶への反応

女性の中絶後の状況を調べているデイビッド・リアドン氏は、「中絶を経験した女性の約50%は、インタビューされた時にその過去の中絶を隠す」「E・F・ジョーンズ

& J・D・フォレスト著「米国女性による中絶の過小報告の調査：一九七六年から一九八八年」人口統計学29(1)：113～126(一九九二年)」という点に注目している。

リアドン氏は又、女性の中絶後の反応は時間の経過によって異なる」と指摘している。「始めから悲しみを感じたり自分を責めたりする人は、その後は感情的に癒されることもあるが、始めはそのようなことを感ぜずにうまく対処できていた女性は後から精神的におかしくなることがある」という。

中絶後の状況が良くないと報告した二六〇人の女性達を対象にした調査で、その内の63%から76%が、中絶からくるネガティブな感情があるとは思っていない、又は認めていない時期が中絶後にあったと言っている。この調査対象から報告された、その認めてい

なかった時期の長さの平均は、63ヶ月だった。「D・リアドン著、中絶後状況論評の中の「中絶後に報告された心理的反応」、2(3)：4～8(一九九四年)」

深く研究してみると、更にネガティブな結果が出て、それはほとんどの女性が二度と中絶はしないことを表わしている。ある研究では「カナダ医療協会」一九七七年一月八日；116(1)：44～46「いかにほとんどの女性が「二度と中絶はしない」と言ったか述べている。別の研究では、中絶後8週間たった中絶後障害の患者は、その44%が精神の混乱を訴え、36%が睡眠障害になり、31%が中絶を選んだことを後悔し、11%が主治医に精神安定剤を処方してもらっていることがわかった。「アシュトン著「勧誘された

中絶の心理社会的結果」ブリティッシュジャーナルオブGyn. 87：1115～1122(一九八〇年)」

中絶はよく、一度きりの問題への解決法だと賞賛される。しかし中絶を経験した女性は、ある研

究によると、一度切りでなく、二回またはもっと中絶を繰り返すことがあるという。一度中絶を経験した女性は、その先も又中絶をする危険性が増すのである。以前中絶したことがある女性が現在妊娠している子どもを中絶する確率は、中絶経験のない女性が中絶する確率の4倍になる。「ジョイス著「ニューヨークの若者の人種と民族性における、妊娠に対する解決方での社会と経済の相互関係：多変量解析」Am. J. 公衆衛生78(6)：626～631(一九八八年)」

リアドン氏が結論付けるように、「この再中絶の危険性の増加は、それ以前の中絶と結び付きがある。それは自己の卑下や、又妊娠したいという意識的・無意識的な願望、または中絶後に増した性生活による。一回目以降の中絶は、妊娠して子どもが欲しいという願望と、恋人に棄てられた場合等の中絶しなければというプレッシャーとの矛盾からくるのである。繰り返される中絶によって自分を罰しているという例も報告さ

れている。「リーチ著「中絶を繰り返す患者」家族計画の見通し9(1)：37～39(一九七七年)」

ここでも中絶支持者達は女性達に損害を与えていると見える。女性の権利を守る運動といても、中絶支持者達は権利だけを達成して、女性達は置いてきてしまっている。勧誘された中絶による乳癌の危険性の増加を確認する証拠が増えていて、中絶手術の医療的危険性の資料も数多く指摘されていると同時に、中絶による感情的または心理的な後から来る影響は、中絶が女性にもたらすもう一つの必要のない苦しみなのである。

実際的に妊娠を援助する、例えば出産前のケア、赤ちゃん用品の提供、親切なカウンセリング、そして短期の住居の提供などが、命を守り女性に本来の意味での選択権を与えられるのではないか。

ステイブン・エアテルト

絶望の克服

妊娠中絶とは、絶望の行為です。絶望感は、中絶を選ぶ時の大きな原動力となるだけでなく、中絶後の回復を妨げる障害でもあります。このことをプロ・ライフの人々が理解しなければ、中絶を選択せざるを得ない女性や、中絶から回復しようとしている女性を上手に手助けすることは出来ないうでしょう。

米国生命フェミニスト協会のフレデリカ・マシューズ・グリーン女史は、女性を中絶に追い込む絶望感について、次のようなわかりやすい表現をしています。「アイスクリームやかっこいい車を欲しがるように、中絶をしたがる女性などいません。罫にかかった動物が、やむなく自分の足をかみ切るように、仕方なく中絶を選ぶのです。」

このたとえは非常に的を射るため、家族計画の本にまで引用されています。なぜでしょう？それは、女性が中絶するのは自分勝手に気まぐれな理由からだという世間の見方を中絶支持者たちは長い間、改めさせた

に世間から同情を求め、その同情を中絶への支持に変えようとしているのです。

実際、中絶を決心するまで多くの女性が苦悩する事実は、中絶支持者と反対者の見解が一致する数少ない点です。双方の力ウンセラーやリサーチャーのすべてと言えないまでもほとんどが、中絶の決断には多くの場合、恐怖感と絶望感が関わっている

と認めています。

けれども、苦悩したからといって、中絶という決断が道徳上受容できるものにはなりません。それは、決断を下した本人にとっても同じ事です。現実には、決心までより深く苦悩した人ばかり、中絶後の苦悩もまた深くなることが、中絶後の調査で明らかになっています。母性の目覚め、倫理上の疑問、そして搾取されたという意識は、中絶手術後も消えません。それどころか、その意識はより強くなり、常に悔やんだり、心理的回避をしたりするようになります。そして、ついに自己非難を引き起こすこと

もありません。

このようなことから、中絶は

自己破壊の行為であることがわかります。精神科医であり、自ら二万人に中絶手術を行った産科医でもあるジュリアス・フォーゲル博士は、次のように述べています。「胎児はその女性の生命の一部だから、どんな女性でも、中絶をすればトラウマを患います。胎児を中絶する時、女性は自分自身をも破壊しているのです。」

プロ・ライフの人々は、いつでも希望はあると主張しています。希望は徳であり、希望の源である神にあります。絶望は、希望と反対の罪なのです。

プロ・ライフの人々は、いつでも希望はあると主張しています。希望は徳であり、希望の源である神にあります。絶望は、希望と反対の罪なのです。

プロ・ライフの人々は、いつでも希望はあると主張しています。希望は徳であり、希望の源である神にあります。絶望は、希望と反対の罪なのです。

プロ・ライフの人々は、いつでも希望はあると主張しています。希望は徳であり、希望の源である神にあります。絶望は、希望と反対の罪なのです。

傲慢と無知

には動物以下となり「神に似せてつくられた」姿は見る影もない。文化の発達

人の「選ぶ権利」を支持したい。女性には妊娠するかしないかを選ぶ権利があると思う。実際に妊娠した子どもは欲しくない場合は、手放して養子に出すなどの選択もある。すべて女性を選ぶのが望ましいと思う。

プロ・ライフ(生命支持)派でもある。神を信じている。神の計画は、人間が子宮で世界への旅立ちを待っている頃からすでに始まっていると思う。現在、胎児の命を奪うことが合法とされているが、道徳的にもカトリックの教えから見ても、明らかに誤りで罪深い。中絶に関する議論が盛んだが、生命の根源を問う、真に理性的な討議が行われているのか？子どもは重荷だからいらぬか？という女性中心に、感情面だけでとらえてはいないか？あるいは真面目な議論と見せかけ、胎児殺しで儲けようとする、ごうつくばりの仕業か？

中絶議論の底辺には人間の傲慢が見え隠れしているように思う。一世紀以上前、科学技術の幕開けとともに、私達は人間が生き物の中で一番賢く知的的だという価値観を掲げてきた。人間の地位を高めようとして結果的

思索

デービッド・リアドン

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

医師の仕事とは、命を支えることであって、破壊することではないです。安楽死が合法化されれば、老人を殺すことが日常茶飯事になります。安楽死が日常的になれば、虚弱で無防備な老人が死の危険に怯えて生きることになるのです。

女性は、可哀想にといつた表情でいたらどうするのか」と。モヤコメントを連発しながら。選挙によって政府高官を選ぶ時この人なら「我々の痛みをわかってくれそうだ」と思って投票する。感情は神から与えられたものだが、操作されやすい。真実もまた神から与えられたものだが、「こちらは操作できない。あなたの真実の基盤が聖書であれ憲法であれ、生きる上での真実は、生命は聖なるもので、人はみな生きる権利があるという、単純明快なことだ。この真実は胎児、高齢者、身障者、知的障害者にもあてはまる。

中絶を善しとする人達に聞いてみたい、「もしあなた達が間違っていたらどうするのか」と。もしプロ・ライフ派が間違っているとしたら、妊娠によって一部女性の生活に不便をかける。だが、養子という機会によって救われる命も多い。しかし中絶賛同派が間違っていたら、胎児に生きた魂が宿っているとしたらどうか？間違いない、人権尊重と言いつつ大量虐殺を犯していることになる。

無知は傲慢を育てる。逆説的だが真実だ。法律学者が己の博識や知性に酔いしれている間に、一刻一刻、小さな命が呼吸も鼓動も愛も与えられずにゴミ溜めに葬られている。神がどんなに嘆いていることか。テリー・A・クラーク博士

中絶反対活動家三千五百人の命を救う

イタリアの中絶反対の活動家たちは、困難な状況での妊娠に直面している女性たちに援助の手を差し伸べることによって、一九九六年に、その国の年間の中絶数の3%に当たる3,500件の中絶を未然に防ぐことができました。チアンシァノ・テルメで開かれた中絶反対運動家の年総会でも、救われた命の数が前年の総数の28%増であったというニュースが歓迎されました。

最近イタリアに移住してきた人たちが、その会に代表者を送った二百三十八ヶ所の危機的妊娠支援センターの援助を受けた女性の49%を占めていました。これもまた著しい増加でした。一九八八年には、移民の占める割合は10%にしか過ぎませんでした。養子縁組や、医療や、経済的支援などを含んだ、若い妊婦に提供される支援の全ては、「いかなる形の公的支援も受けずに、本来自発的な努力のみによって」実行されたことを、中絶反対の活動家は知らされたのでした。

(MND)

生命に関する話題：養子縁組

子どもを殺さずにすむ中絶にかわる解決策

子どもを生む決心をした未婚女性の97%が、自分自身の手で子どもを養育する道を選ぶという。至って自然な事ながら、誰も彼女らに子どもを養子に出す事も出来ない。従って、常に百万組もの夫婦が養子縁組の予約リストに名を連ねており、自分らが年をとりすぎないうちに養子を欲しい者だと願っていることなど未婚の母達は知るよしもない。

養子を望んでいる夫婦は実際子どもを手にするまで、三年から五年待つのが普通だ。子ども一人に対して少なくとも二十組もの養父母が名乗りをあげているのが現状だ。需要の方が非常に高いのに対して、養子に出される子どもの供給率が低すぎるので、もう一人養子が欲しいという一家に対して、養子縁組が再びなされる例はほとんどない。

一九八六年を例にとると、千件の出産に対して四百二十一・九件の中絶、千件の中絶に対して十五・五件の養子縁組、千件の未婚女性による出産に対して六・五件の養子縁組があったとされる。

養父母の登場を待ちこがれる子ども達

養子欲しさのあまり世界中を探

してまわる養父母候補者達もいるほど、養子の需要が高いにもかかわらず、何年もの間、養父母の登場を待ちこがれる子ども達がいる。その子達の多くが黒人である。およそ四万人ほどの黒人の子ども達が、彼らを一生愛してくれる家庭を待ち望んでいる。

人種をこえた養子縁組

統計はだいたいにおいて、こうした養父母を待っている子ども達の養子縁組に好意的だ。子どもが教育的・社会的に成功するために必要なただ一つの最も重要な要因をあげるとすれば、それは安定した、両親と共にいる家庭であるらしい。そして、もし、養子縁組が成功するために最も重要な要因をただ一つあげるとすれば、それは子どもが若ければ若いほど、より良い結果が得られる。人種の違う子どもを養子にした例は大変少ないのだが、サイモンとアルシュタインの研究発表によると、人種の違う養父母に引き取られた子どもに質問したところ、その71%が白人の家庭で育てられている事に何も問題はないと答えている。

教会は養子縁組に役立てるか。

養子の欲しい夫婦と家庭の欲しい子ども達。この状況に、教会が何か手助けできるだろうか。

黒人牧師ジョージ・クレメンツ師は子どもを一人自分の養子にし、養子縁組可能な子どもの数が、養子を望む夫婦の数をうまわるといふ事実を発見した後、「一人の子ども、一つの教会」運動を開始し始めた。師は、黒人教会に、黒人の子どもを養子にした家庭を支援するよう、そして長期間にわたりその一家と教会とが近い関係であることで、子どもの成長につれ、家族や子ども自身のニーズにいつでも応えられるよう援助することを働きかけた。その家族に迎えられた新たなメンバーにとつて、ずっとその地域に安住していただけるような環境を作るのだ。

もしあなた方の教会が、誰にも受け入れられない日本人の子どもを助ける方法を見つけ出しておいででしたら、御一報下さい。

Presbyterian Pro-Life News/writer



苦しみから神の愛を引き出す

冷蔵庫に写真を留めているマグネットの下から、可愛い男の子が私にほほ笑みかけています。それがどうしてそんなに珍しいことなのでしょう。冷蔵庫に坊やの写真を貼つてあるお母さんの冷蔵庫のドアとそれがどうしてそんなに違うのでしょうか。アーロンをそんなに特別で珍しい存在にさせている理由をお話しします。私は坊やに一度もお話を読み聞かせてやることがありません。彼にキスをすることも、夜ベットで寝かせつけたこともありません。彼の金色の髪を触ったこともありません。坊やの別の母親がそのようなことをしているのです。私は彼の生みの親ですが、彼が生まれたときに養子に出して育ててもらったことに決めたのです。それは容易な決心ではありませんでしたが、そう決心してよかったですと私は思っています。

私は、衝撃的で苦しい経験をした後、人生をやり直すために新しい地域に引っ越したけれど、結局はショックと苦しみの新しいシナリオが待ち受けているだけでした、何年か前のあの頃を思い出します。

ジョンとは地元のプールで会いました。友人の一人が、「彼にはあなたのような人が必要なのよ。」と

言いました。自分自身の尊厳と必死で戦っていたので、私は人に必要とされるのが必要でした。最初私たちの関係は楽しいものでした。私たちには共通したところがたくさんありました。私たちは二人とも自然や詩やキャンプがとても好きでした。ジョンは私と一緒に教会に行き、私たちは神様のことを長い間話し続けました。ジョンには私からの支えや励ましが必要でした。

しかしそれから、性的な要求が始まりました。私が嫌がると、ジョンは引き下がって謝りました。しかし、またすぐに迫ってきました。私は自分が、彼がただ叩き切り続けている丸太が何かのような物であるかのような気がしました。このことがどのような結果となりうるかがわかって、私はその関係から逃れようと思いました。しかし、ごまかしのうまいジョンは、「君が僕を捨てたら僕は死んでしまうよ。僕は気が狂ってしまつよ。君なしでは僕は生きられないんだ。」と嘆願しました。残酷なことはいなくなかったので、「ただの友達でいよう」としましたが、騙されてどうしていいかわかりませんでした。今なら、彼の気持ちに対する責任は私にはなかったとわかるのですが、「今」とは、彼に襲われて、妊娠

してしまつた後のことなのです。どうすべきか決めようとするころは、暗やみで出口を探しながら煉瓦の壁を通り抜けようとしていくようなものでした。出口は全くなりませんでした。結婚？とんでもない。あるいは片親で赤ん坊を育てる？でも、それは私にとっても赤ん坊にとっても、最良の策ではないでしょう。子どもを養子に出す？でも、本当にそんなことが私にできるでしょうか？揺れ動く気持ちと何度も何度も闘っている、水を絞つたあとの布巾になつたような気がしました。

中絶？時々強い誘惑にかられましたが、私と私の胎児に対する神様の愛を感じて、私にはできないと知りました。私はその幼い命に自分を置いてみて、我が子を、子どもとして、青年として、大人として、親として想像しました。十分に人生を経験する可能性を持った本物の人間が私の中にいたのです。神様の助けがあれば、私は将来に立ち向かつていけるでしょうし、たとえ何が起ころうとも私が善なるものを見つける手伝いを神様がしてくださいませ。

ますます私の考えは養子に絞られていきました。数えきれないほど、決心がついたり、やめたりを繰り返しました。私の決心は、私の残

りの人生に耐えるものでなくてはなりませんでした。神様は助けを求め私の叫びを忠実に聞き入れて下さり、とても優しく私の態度や気持ちを変え始めて下さいました。私は自分の心の中に起こっている矛盾に驚きました。思いが次々と浮かんで、熟練した体操選手のように目まぐるしく変わりました。私は妊娠は嫌いです。赤ん坊は好きです。吐き気や、窮屈な服や、大きく重くなった身体は嫌いです。それが私の中でちょうど今育っているすばらしい人間のせいだというのは好きです。

可愛いアーロンは一九八九年の八月二三日にこの世に生まれました。私は彼を腕に取り胸に抱き、小さな頭に何度も何度もキスをしました。「私の坊や。私の可愛い坊や。今は、全部私のもの。」と囁きました。わずか17日後、私は空っぽの腕で儀式の場から歩いて去りました。私の養子の決定を支援してくれた親しい友人が何人か集まってその儀式に私と共に参加をしてくれていました。アーロン坊やは私の腕に抱かれていました。ゆったりした白衣が、すぐに他の人に託される私の母親としての立場を象徴していました。

「ああ、道行く人たちよ、ながめてごらん、私のこれにまさる苦しみがあるだろうか。(哀歌 一：12)友の声は読みながら震えていました。私も震えていました。というのは、あと何分かすれば私は他の人の腕にアーロンを委ね、白衣を脱ぎ捨て、夏用のショートパンツと上着を身につけて、人生の新たな門出に向かつて歩いて行くことになっていたのでした。

た。我が子を諦めなければならぬ苦しみは想像を絶するものでしたが、正しい選択をしていることはわかっていました。当時の私の境遇では、私の願うアーロンの母親のように、私はなれなかったでしょう。

そして今、冷蔵庫から微笑んでいる男の子は、愛情に満ちたキリスト教徒の家庭で成長しているのです。アーロンと私は彼の八回目の誕生日を祝つたばかりです。でも、私たちが一緒にいたのではありません。私たちは別々に、彼は世界の反対側で養父母と一緒に、私は親しい友人と一緒に黄色いバラを飾つて外で食事をして、私の息子アーロンの話を長い間しながら全く同じ事を祝つたのです。それは本当のお祝い：アーロンの人生を祝うもの、神様が私の人生にしてくださいと癒しを祝うものだったのです。

アーロンのことを思うと喜びでいっぱいです。私は、彼の話をありのままに話したいのです。なぜなら隠さなければならぬことは何もありません。神様はアーロンにとつて最良の方法だと知つて、アーロンを他の人の腕に託す強さを私に与えて下さいました。苦しみの深淵から喜びの丘へ神様は私と共に歩いて下さいました。この経験のおかげで、私は人生の苦難に耐えられる安らぎと強さを持つたのです。他の方法を選んでいたら、私は今もっと弱い人間になっていくことでしょう。

中絶は女性の 選択肢だろうか？

ほとんどの女性は、少なくとも70%は、中絶が非道徳的である、と考えている「ロサンゼルスタイムス」による一九八七年三月十九日の調査。メリー・K・ツイマーマン著「中絶の道」ニューヨーク市プリーガー出版社一九七七年も参考にする「よい」。しかし、女性達が自分の良心に逆らってでも中絶をするのは、周りの人や環境からのプレッシャーが原因である。

女性達は恐れから中絶を選ぶ。子どもを育てられないかもしれない恐れ、中絶をしなければ相手が離れていってしまうかもしれない恐れ、自分の人生をコントロールで

きなくなるかもしれない恐れ、等。

多くの女性には、家族や愛している人からの支えが足りない。中絶した80%以上の女性が、もし周りの環境が良かったら、または愛する人達からの支えがあったら子どもを生んでいたと言った。「デイビッド・C・リアドン心理学博士著「中絶した女性―もう沈黙しない」(シカゴ市ロヨラ大学出版、一九八七年)による。」

女性の立場にしてみれば、「中絶」は本当の選択肢ではない。それはあきらめの行動なのである。そして基本的なことだが、女性が自分の良心や母性本能に逆らってまで中絶するからこそ、中絶による心理的な影響は大きいのである。

中絶反対情報ネット

プロ・ライフ運動のためにあなたが出来ること

- プロ・ライフ問題について常に祈る
- プロ・ライフの組織に加入する
- プロ・ライフ運動のグループを経済的に支援する
- 高齢者や病人、孤独な人を訪問する
- 里親になる
- プロ・ライフの刊行物を定期購読する
- 地元の新聞に投書する
- プロ・ライフ問題全般にわたって勉強する
- 養子をもらう
- 末期患者を支える組織を支援する
- 医師と妊娠中絶について話し合う
- 医師と安楽死について話し合う
- 地域でプロ・ライフグループを結成する
- グループの次のミーティングにプロ・ライフ派の講演者をよぶ
- あなたの教会の司祭にプロ・ライフの情報を与える
- 公共の場にプロ・ライフの冊子をおく
- 若者に貞潔の大切さを訴える
- 教会にプロ・ライフの冊子をおく
- 友人を招いてプロ・ライフのビデオを見せる
- 妊婦に積極的な支援を依頼する
- 地域の「性教育」番組を批評する
- プロ・ライフ派であることを示すピンやネックレスをする
- プロ・ライフの講演をする
- ラジオ番組でプロ・ライフの話をする
- 中絶支持派のイベントや講演者に対しピケを張る
- 新聞にプロ・ライフの広告を載せる
- 地域の図書館にプロ・ライフの本を寄贈する
- 「罪なき者のための共同墓地」を創設する
- ティーンのためのプロ・ライフグループを結成する
- 夫のいない母親を支援する
- ベビーシッターをして母親を助ける
- 計画出産活動を検討する
- 地元のプロ・ライフ事務所でボランティアとして働く
- 身体障害者を保護し、便宜を図る
- 養子制度を奨励し、促進する
- 危機に瀕した女性のための「ホーム」を作る
- 戸別訪問し、プロ・ライフ冊子を配布する
- 常にプロ・ライフ冊子を携帯する
- プロ・ライフの祈禱会を発足させる
- 人工妊娠中絶薬によるバース・コントロールについての知識を広める
- 中絶手術を行う病院をボイコットする
- いつ、どんな立場においても生命を守るために発言を続ける
- 公共の行事でプロ・ライフの冊子を配布する
- 友人やその家庭にプロ・ライフの本を貸す
- 妊娠中絶をした男性・女性に助言を与える
- プロ・ライフのための徹夜の祈りや礼拝を主催する
- しっかりした家庭を築き、模範となるような人生を歩む
- 例外を設けずすべての胎児を保護する
- すべてのプロ・ライフ派の人々のために常に祈る
- 教会の司祭に、説教の中で生命の保護を説いて下さるよう依頼する
- 地元の新聞にプロ・ライフの折り込みピラを入れる
- 中絶によって傷ついた女性を手助けする
- 助けの必要な母親を経済的に支援する
- 助けの必要な妊婦を自宅で世話する

より詳しい情報については、プロ・ライフ事務所に電話をして下さい

クリエイティブな発想を持ちましょう！

あなたに出来ることはまだまだたくさんあります！

ベトナム政府の懸念する

若者の中絶ブーム

ベトナム政府や海外の専門家によると、ベトナムでは産児制限の方法として中絶の適用が広がり、数を増している。昨年では、百万件以上の中絶が報告されている。それは政府が国の目標として設定した数の四倍に値する。

そのほとんどの中絶は、病院や民間のクリニックで行われている。ベトナムでの典型的な簡単に終わる中絶は、90分程で終わる費用は四千円程である。

民間の健康保健の専門家達が特

に危険を感じているのは、最近増えてきた未婚の十代の若者の中絶である。政府の長官はこの傾向を、「我々の政策の失敗。これから我々は若い女性達に、中絶が一番の選択肢ではないと説得していかなければならない。」と言っている。

今でもベトナムでは伝統として男の赤ちゃんを重んじているが、健康保健の専門家によると、中国とは違い、超音波で赤ちゃんが女の子と判つても、一

般的に中絶は行われたいという。しかし多くの家族は、最初の子どもが女の子だった場合、男の子が産まれるまで産み続ける。中には「控え」の男の子も欲しが家族もある。

「私達には男の子が二人いますが、一人は溺れて亡くなりました。一人しか男の子がいなかったのは危険だったのです。」と南ベトナムで農業を営む34歳のヌグイエン・チ・ハイは言う。彼女は去年に二人目の息子を産むまでに、七人の娘を産んだ。「家族の血を絶やさないための人間を確保しておかなければならないのです。」

99年2月11日サンホセマキユーリー新聞

基本的なこと、

知っていましたか？

何の罪もない人間の命を守るうとする一市民がクリスチャンだからといって、その人の立場が宗教的信仰だけによるものであるとは限らない。人間の卵子と精子の結合が、受精の瞬間にDNAが識別されるたった一人の個人を造り出すことは科学がきちんと証明している。この点を証明する生物学の本が何年も前から出されていることは周知の事実だが、今ではこれを明らかにする発生学に関する文献も数多く出版されている。

何の罪も犯していない全ての命を守るのは我々の義務である。なぜなら私たちは神が命の創造者であることを信じているし、人間があらゆる面において無比の存在であることを知っているし、潔白な人間が危険に直面しているような社会に本当の正義など存在しないことを知っているからである。現行の司法決定や法的枠組みが殺人行為を「選択の自由」というごまかしで公認しているような状況において人がきちんと公正に扱ってもらおうことなどできるだろうか。

答えは「ノー」である。社会において最も弱いとされる者が数秒ごとに組織的処罰に合わされるようなところに真の自由など存在しないのである。
(プロ・ライフ)

中国 最新強制中絶／不妊手術：

国際連合が認めている、チベット国内で活動している非政府団体である、「チベット女性協会」のレポートによると、中華人民共和国はチベットでも「一人っ子政策」を施行することを決定した。

「産児制限は強制されている。カムとアムドの人口を抑制するために」とレポートには記されている。産児制限の機動チームは、中絶や不妊を施す女性を集めるために、田舎や田園地帯をかきわけて探す。自分達の妊娠についてちゃんと知識のある女性達も中絶を受けさせられ、続いて不妊手術を強制される。」

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

[201] 生か死..... + 郵送料
 [202] 第二の処女生..... + 郵送料
 [203] デート..... + 郵送料
 [204] どうするの?..... + 郵送料
 [205] "NO"という技術..... + 郵送料
 [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
 [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
 [208] していましたか..... + 郵送料
 [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
 [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
 [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
 [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
 [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
 [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
 [306] ミニソフィアAceエース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

[401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
 [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
 [404] いのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
 [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
 [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
 [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS).....15000 + 郵送料
 [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え).....2987 + 郵送料
 [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料
 [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
 [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
 [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
 [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
 [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
 [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
 [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
 [511] (本) 赤ちゃん: 最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
 [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
 [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
 [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
 [515] (本) 経口避妊薬: ピル.....100 + 郵送料
 [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

暗黙の了解

正直、中絶に関して言えば、言葉だけで具体的な処置の仕方とかは知らなかった。この世に生を授かって来た小さな命。人の肉眼で姿を確認できない約10カ月。そして暖かな母の胸に抱かれ、確実に自分の未来を築き上げていく、そんなごく自然な事が無理やり、しかも小さな命が唯一安心し頼りにしている我が母の手で、その顔を見ることなく命の灯を消されてしまうのだ。もしも自分と考えるだけで、何とも言えない、今までに一度も味わったことのない思いが胸をよぎる。

一人の人間として扱われていない。これは中絶の合法化によって生じた紛れもない事実である。殺人で裁かれる現在、なぜ中絶はこの世の中に暗黙の了解と云った形で浸透しているのか。小さな命は人としてのごく自然な形を法律という誰かが認めざるを得ない魔の手によってバラバラに引き裂かれてしまっ。たった一人の自分の母親の責任逃れによって、中絶をした女性には、一生癒せない大きな心の傷を十字架として背負って生きなければならぬ。決して忘れてはならない、忘れようとしてはならないから、十字架なのだ。

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月

[515] 経口避妊薬：ピル

注文： 1 - - - - 5 1部 = ￥100
 6 - - - - 20 1部 = ￥75
 フルカラー 21 - - - 999 1部 = ￥50
 1000 - - 以上 1部 = ￥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

パンフレット申し込は・・・

1 ~ ~ 5 1部 = 35円
 6 ~ ~ 100 1部 = 25円
 101 ~ ~ 500 1部 = 20円
 500 ~ ~ 以上 1部 = 15円

組み合わせは自由です

賢明な言葉

今日は、ある匿名の女性から届いたお話を紹介したいと思います。それを聞くことによつて、私達は全員今までより良い人間になれると思います。それは「出産における安全な選択肢を求める親と専門家の国際協会の秋号に掲載されたものです。以下は、彼女の話を用いたものです。」

「私が中絶に対してそれほど敏感に反応するのは、一つには私自身が中絶の経験者だからです。もう十年以上も前のことで、とても若いときでした。その時にはそれしか解決策がないように思えたのです。相談に行った医院は、他の方法を教えてはくれませんでした。私は胎児の成長について全く何の情報も与えられませんでした。実際、胎児は『くるみ大の大きさの組織の塊』だと教えられました。今なら、私は決して中絶の承諾をしなかったでしょう。」

「私は今でもそこでの処置に腹立たしさを感じています。赤ん坊を中絶しようと決めたことは、今までの人生で最も後悔していることです。それは取り消すことのできないものなのです。何年もの間、私は中絶のことを考えないようになり、打ち消そうとしました。しかし、再び妊娠した時、胎児の成長について知り、少しずつ自分のしたことが分かり始めました。そして、この腕にわが子を抱き、紛れもない本物の人間だと知って、ようやく中絶した我が子のことを自分が悲しむことが許せるようになり始めたのです。」

「最初は否定し、次に、腹が立ち、それから悲しみましたが、今ではほとんど克服できました。いやしの一部として、私は自分のしたことに対する責任、つまり我が子を殺すことに関

わったことを認めなければなりませんでした。自分がしたことがあまりにも恐ろしいことで、そのことにどう向き合えばよいかわからないので、多くの人が、自分が命を奪うことに関わったことを否定し続けているのだと今私は確信しています。しかし、その現実と向き合うことができないうちは、いやされることはないのです。私がようやく現実と向き合うことができるようになった時、苦しみと罪悪感が、実際心を和らげてくれるもの、それまで私の心の中にあつた虚しさを少し埋めてくれるものとなつたのです。私はこれからもずっと自分が失つた子どものことを嘆き悲しむでしょうが、今その苦しみは私に行動を起こさせる原動力となつたのです。」

「確かにそれは今でも苦しいことですが、私は自分のことを話し、真実が輝き続けるようにと願つて、危機的な妊娠をした女性達とともに頑張ります。私達はためらわず、恥ずかしがらずに中絶は誤りだと言わなければなりません。なぜなら、中絶は本物の人間を殺すことなので、すから。私達は困難な状況にいる女性達に手を差し伸べ、彼女達を愛し、彼女達が自分ひとりで問題に直面しているのではないことを知らせる必要があります。私達は彼女達に胎児の現実の姿について教え、また、最初の妊娠三ヶ月の間に心が動揺して迷い、すぐ胎児を拒否したり中絶したりしないように教えなければなりません。そして彼女達が命を尊重し、赤ん坊を中絶しないと決心した時には、妊娠期間中ずっと彼女達の世話をし、彼女達が尊敬と思いやりを持つて産めるように助け、赤ん坊の母親になれるように手助けしなければなりません。」

彼女の手紙には名前がありませんでしたが、彼女が誰であろうと、私達はこの賢明で愛溢れる言葉に感謝します。

事務所便り

高知新聞（一月十七日付）にアメリカで卵子バンク設立と掲載されておりました。精子バンクについては以前から存在していて、倫理面からいろいろ問題になっていましたが、今回新しく卵子バンクも作られたとのことです。私達は良く自然との共生という言葉を使いますが、自然の流れを守つて生きる時、私達が幸せに生きれるのではないのでしょうか。卵子と精子で赤ちゃんを作つて売買することは、赤ちゃんにもそれに関係する人にも幸せは訪れません。いくら自分の家に赤ちゃんの声を望んでも、このような方法では幸せになれるわけがないのです。『提供者の卵子を保存し、不妊治療に用いる事業を進めたい』とはすでに凍結卵子から、一組の双生児を含む五人の赤ちゃんを生ませた米アラバマ大のマイケル・タッカー准教授の言葉ですが、家に赤ちゃんを望む時、養子縁組は両方が幸せになれるであろう一つの解決策です。

以前、産婦人科の先生の講演で、日本全国で不妊治療を受けている赤ちゃんを望むカップルはどれくらいいるのでしょうかと尋ねたことがありますが、その先生ははっきりした数字は分からないけれどと前置きして、36万位と答えられたのが、記憶に残っています。平成10年の人工妊娠中絶件数は届け出があつたものだけで、33,220です。これだけのいのちがたった一年で失われています。片方では36万カップルが赤ちゃんを望んでいるのです。

中絶も人工妊娠中絶と言われるように、自然ではないから、赤ちゃんの苦しみはもちろん、女性の苦しみも出てくるのでしょうか。

これからも、自然の流れが守られているか注意して過ごしましょう。自然の流れが守られない時は勇気を出して、反対の声を出しましょう。